

学長室だより

2019.08.06 NO.18

竿燈まつり 留学生も

今年も、3日から秋田竿燈（かんとう）まつりがはじまった。学長の私も例年通り、最終日に、はんと姿でちょうちんを手に先頭に立って歩く。6年前に赴任した時は先導で歩くのは少し気恥ずかしかったが、沿道から「学長、頑張れ」と声をかけられると、「おう！」と笑顔で応えられるようになった。今では、2時間余りのそぞろ歩きに魅せられている。

私の仕事はパフォーマンスを始める前に、沿道の観衆に「国際教養大学の学長で一す。今から本学の自慢の竿燈チームの演技をごらんに入れま一す」と、大声を張り上げてあいさつすることだ。これが2時間の行列の間に3回ある。これも最初は慣れなかったが、今は大きな拍手をいただくまでになり、いつの間にかすっかり秋田の人になっている自分を感じられるようになった。

今年も本学からは2本の「大若」が演技を行うが、4月初めに練習を始めたばかりのころは、学生たちの竿燈は、体形も型もおぼつかなかった。しかし、今では数カ月の猛練習を経て見違えるように上達してきた。例年、最終日には妙技会の決勝戦が行われるが、昨年は100を超える出場チームのうち、本学の精鋭2チームとも3位、4位に入賞し、大いに面目を施した。

差し手には、海外からの留学生たちも積極的に加わる。はんとを着て、手ぬぐいはちまきをし、足袋姿で練習に励むのは見ていて爽快だ。留学生たちにきいてみると、秋田に留学する前に先輩の留学生から「秋田にはこんな面白いものがあるから、是非やってみるといいよ」といったアドバイスがあったという。

こうして、代々留学生が竿燈でつながり、秋田の伝統文化を連綿とつないでいるのはうれしいことだ。以前、竿燈まつりに参加して母国に帰った元留学生や卒業生の中には、この祭りに参加するためだけに再び秋田に戻ってくる人もいる。

感心するのは、練習に参加する学生たちの礼儀正しさだ。特に、日本人学生に交じって練習する留学生たちはあいさつの言葉や礼の仕方など、通常日本人でも見逃してしまう作法をよくわきまえている。そのために全体の動作がキビキビして、一層引き立つのだ。これもうれしい感動である。

本学の学生や教職員らでつくる「竿燈会」はかくして短い歴史ながらも、着実に学生活動の中に定着してきた。しかもその差し手は外国からの留学生も交ざった国際チームだ。今では、秋田市竿燈会に帯同させていただく形で、モスクワや台湾やアメリカなどで実演するまでに成長した。将来、この竿燈会が連綿と続いていった先に、秋田の文化がどれだけグローバル化するか、楽しみでならない。

およそ270年続いてきたと言われる「竿燈まつり」はこの大学でも、その美しく揺れる竿燈のように、国際化に向かって着実に動き続けていると言えるのではないか。学長として、ひそかに自慢に思っている。

注) 朝日新聞秋田版「あきたを語ろう」からの転載です。以下 URL からご覧いただけます。
<http://www.asahi.com/area/akita/articles/MTW20190806051550001.html>



鈴木 典比古

President Norihiko Suzuki, DBA